

江戸期の下方限、鹿児島郡の名残がほどよく伝承され、 市街地としても発展した地区

城西地区は、江戸期では鹿児島城下の下方限（草牟田・新照院・常盤・西田）と鹿児島郡（西田村・永吉村・下伊敷村）にあたり、城下士の居住地区や町人町、上級武士の別邸地や景勝地、狩場に田園地帯といった多様な側面がありました。

明治期に入ると鹿児島市へ編入し市街地郊外として発展、道路が整備され周辺郡部との交通も確立していきました。

明治後半には鹿児島刑務所、大正期には草牟田墓地が造営されるなど鹿児島市の郊外の役割も担っていましたが、路面電車も敷設されるなど、市街地近隣の住宅地としての基盤も整えられていきます。

戦後はさらに大きく発展しますが、神社や旧跡も大切に保存、継承され、地域の物語に触れることができる地区が城西といえるでしょう。

1. 甲突川右岸の近世、それ以前

城西地区の真ん中には甲突川が流れています。その右岸と左岸とでは特に江戸期は大きく環境が異なりました。右岸の原良には田園が広がり、桜島の眺望も楽しめるのどかな場所でした。そのため上級武士の別荘なども設けられ、景勝地としても知られていました。

①^{おぐろ}尾畔（景勝地）

鹿児島城下の郊外に位置し、原良の背後に連なる山は尾畔山と呼ばれていました。山の前には田園が広がり、四季の移り変わりを楽しめる景勝地とされ、鹿児島八景の歌にも登場する名所でした。そのために尾畔には島津家の重臣たちの別邸が建てられ、また当主も鷹狩に山に訪れました。

②小松帯刀屋敷跡

吉利郷を私領地に持つ鹿児島藩の重臣・小松家の別邸があった場所です。幕末の名家老、小松帯刀もこの屋敷を訪れ、病気治療などでも滞在したとされています。また、小松と親交のあった坂本龍馬もこの屋敷を訪れたと伝わります。



小松帯刀屋敷跡

③花岡屋敷

現在の鹿屋市花岡は江戸期には花岡郷と呼ばれ、島津本宗家の分家である花岡島津家の領地でした。花岡島津家の別邸が花岡屋敷です。周辺には島津家の重臣の屋敷が並び、調所家や知覧島津家の別邸もありました。



花岡屋敷跡付近

④桃岡（八田^{ともりの}知紀幽閑の地）

八田知紀は寛政 11（1799）年に西田村で生まれた国学者です。島津斉彬の命を受けて、奈良時代に大隅国へ流された和気清麻呂の足跡を調査したり、寺山炭窯の石碑の碑文を記したりしました。明治維新後は宮廷歌人として宮内省の御歌掛も務めました。晩年、ひとりで静かに暮らした場所が桃岡と呼ばれており、記念碑があります。



桃ヶ丘公園入口の案内柱

⑤^{しよきん}諸禽供養塔

軍事訓練の一環でもある鷹狩などで狩られた鳥や、害獣として殺傷された鳥などを供養するための石碑です。周辺の山々は鷹狩などが行われる場所で、また御鷹所と呼ばれる藩主の狩場も設けられていました。



諸禽供養塔

⑥鷹師の地名

明治 32（1899）年から鷹師町となりましたが、それまでは鷹師馬場と呼ばれていました。地域の古老の伝えによると、この地域には鷹狩の際に指南する鷹師匠が暮らしていたことが地名の由来とされています。また別の説では、甲突川の氾濫原（洪水などで土砂が流入してできた場所）として高洲ができ、高洲（たかす）が転じて鷹師（たかし）になったともいいます。

⑦千眼寺跡

黄檗宗の寺院です。島津重豪が江戸から招いた若仲という僧侶に開山させたと伝わります。文久3（1863）年の薩英戦争の際には、海に近い鹿児島城を避けて千眼寺に本陣が置かれ、当主などが待機しました。明治2（1869）年の廃仏毀釈によって廃寺となりました。



千眼寺跡

⑧薬師の薬師堂

昭和3（1928）年に個人宅のザクロの木の下から薬師様が発見され、町内会が譲り受け薬師堂を安置して祭ることになりました。近年までは薬師公園の一角にありましたが、現在は町内会の管理を離れ、近くの寺の境内に移設されています。



薬師堂（2007 年撮影）

⑨石井手用水路（太鼓橋・すすけ橋・かけごし）

文化7（1810）年、伊敷村飯山に取水口を設け、甲突川の水を小野・永吉・原良・西田・武に供給し、水田で利用しました。三ヶ所のトンネルを掘り、工事には吉野方面からも人夫が加わったとされています。途中の



ほとんど暗渠となっている
石井手用水路



石井手用水の水を使ったとされる永吉の水車館機織場跡碑

水路には橋も設けられ、街道や原良川を渡らせたりして通されました。かけごしの地名は、原良川の上に用水路の橋がまたいでいたことが由来です。

⑩日枝神社（原良5丁目）

大山祇神を御祭神とする神社で、別称は山王神社と呼ばれていました。明治の中頃には周囲が約15mもある巨大な杉の木があったといわれています。現在は地域の人々の

うぶすな

産土神として信仰されています。



日枝神社

⑪陣ヶ丘公園

原良から明和団地に登る坂の途中の住宅街にある公園名です。地域の字名から採られた公園名と思われますが、この場所に城や類似するものがあった記録はありません。南西方向には原良塁と呼ばれる山城があり、その関連かもしれません。

⑫^{はぜ}櫨之木馬場

櫨はろうそくを製造するための材料にもなり、鹿児島藩では栽培が奨励されました。原良地域でも文化・文政年間（1810 年から 1826 年）に櫨の木が植えられて、通り名になりました。



櫨之木馬場付近

⑬^{みっかん}西田町から水上坂

鹿児島藩内の主要な道の 1 つである出水筋は、鹿児島城から甲突川に架かる西田橋を渡り、西田町を抜けて水上坂を登り、横井、伊集院へ向かうので、水上坂が見送りや出迎えの場所でした。西田町は鹿児島城下にあった上町、下町と並ぶ町人町で、会所には幕末にジョン万次郎が留め置かれたことで知られています。水上坂は坂の下に清水が湧き出る泉があったことから名づけられたといい、今も井戸跡が残り、水神碑が祀られています。



水上坂

2. 甲突川右岸の近現代

明治期には、まだ鹿児島市街地の郊外であったことから刑務所も建造されました。昭和 60（1985）年に吉松町に移転するまで広大な敷地の刑務所のある地域でした。その後、かつての田園地帯を中心として開発が進み、市街地の生活を支えるための工場などが建てられるようになりました。さらに、戦後には住宅地の拡大に伴い工場も閉鎖され、商業施設や公共施設に転用されていきます。

①西郷家の墓地

大正 10（1921）年に、墓地の近くに屋敷を構えた西郷菊次郎が、先祖の墓を南林寺墓地から移転させたものです。西郷隆盛の祖父・祖母・父・母といった近親者の墓が立ち並んでいます。また西郷隆盛の弟である吉二郎や墓を移転させた西郷菊次郎の墓もあります。



西郷家の墓地

②永吉の橋

城西 1 丁目、城西中学校の南側の区画に甲突川に注ぐ水路が街区を跨いで流れており、道路に小さな橋がそれぞれ架かっています。特に 1 丁目 4 と 1 丁目 5 の間の橋には「一之橋」、1 丁目 14 と 1 丁目 19 の間の橋には「五之橋」と彫られた欄干もあり、このあたりが田園から市街地化する過程の古い構造物であることが推測されます。



五之橋の欄干

③鹿児島授産場

西田村の旧士族の桂札一、有川勘助らが藩政時代の養蚕方を再興させようとしたものです。事務所は薬師にありました。明治 13（1880）年には明治政府から 1 万 5 千円の授産金を借り、最初は養蚕に特化して行いました。明治 16（1883）年には犬迫や吉野などにも桑園を拡大しました。しかし、桑苗が気候に合わず、明治 26（1893）年には解散してしまいます。薬師町には明治 22（1889）年建立の「遺恵碑」という石碑もありました。西南戦争後の士族に仕事を与えるため、伊地知正治が出資し甲突川の西に土地を買い、桑の栽培が盛んに行われたことが記されていました。

④原良の防空壕

原良団地に向かう山際の地質は入戸火砕流堆積物ことシラスで、人力でも掘ることができます。住宅地や工場などもあったことから、戦時中には防空壕が掘られました。なかには大規模なものもあったといえます。



シラスの崖と防空壕

⑤鹿児島刑務所跡（県指定文化財）

明治 41（1908）年に、鹿児島市小川町にあった刑務所が永吉に移転しました。当時の永吉は鹿児島市街地の郊外にあたり、田園地帯で広い敷地も得やすかったことから移転が決まりました。整地のために永吉背後の山からシラスが運ばれ、刑務所の建材である石は甲突川中流域の小野などから運ばれました。その作業には受刑者もあたったとされています。全体の設計は鹿児島出身の山下啓次郎が担当しました。山下は当時、日本国内に他に四か所建造された巨大刑務所の全てを担当しています。他の建物はレンガ造りですが、鹿児島のみが石造りです。現在は鹿児島アリーナの敷地に正門だけが残されています。



鹿児島刑務所正門跡

⑥陸軍墓地

伊敷村には陸軍第 6 師団歩兵第 45 連隊が開設されましたが、そこから出征し戦争で亡くなった方々の墓地です。日清・日露戦争から満州事変や太平洋戦争までの戦死者が慰霊されており、敷地内には記念館もあります。



陸軍墓地

⑦おはら節発祥の地

鹿児島を代表する民謡の「おはら節」のルーツが原良にあるとされています。もともと「おはら節」は都城方面にあった「安久節」が元になっているとされ、原良がルーツとされる根拠は「伊敷原良の化粧の水」という歌詞です。化粧の水は、この地が田園地帯であり、その泥と化粧を掛けたとされています。



原良第二公園のおはら像

⑧米あらい節

永吉町に伝わります。島津氏 17 代当主・義弘が朝鮮出兵の際、米で造る酒がふるまわれ、それが美味であったとされています。そのために戻ってからふるまうようになり、米を洗う光景を踊りにしたものと伝わります。

⑨日本澱粉工場跡

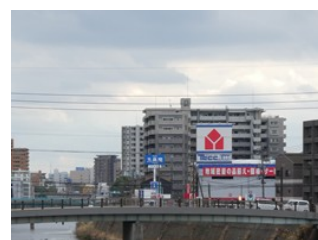
澱粉を使用して焼酎造りに従事してきた本坊家によって造られた工場の1つです。工場は地域に大きな建物がない中で目立っていたといいます。昭和 11（1936）年には澱粉を原料としてブドウ糖製造にも成功しています。現在、工場跡の敷地は TSUTAYA 城西店や鹿児島西警察署などになっています。



日本澱粉工場跡

⑩火力発電所跡

大正 10（1921）年、甲突川沿いに市街地へ送電するための発電所が造られ、目印となる大きな煉瓦煙突がありました。発電所が閉鎖されたのちには宝酒造の醸造所になりました。



火力発電所跡付近

3. 甲突川左岸の近世

甲突川左岸の江戸期は、鹿児島城下の西端にあたり、下級武士が居住し、また寺社が立ち並ぶ地域でもありました。その痕跡が地域に残されています。また、新照院は鹿児島城の北西に位置し、その入り口を守護する場所であったことから、武家屋敷も斜面地に立ち並び、現在もその名残があります。

①草牟田ツゲ櫛

下級武士の居住地域である草牟田は、江戸期にはツゲ櫛の製造が盛んでした。武士としての仕事だけでは生活が成り立たず、内職として行われていたとされています。ただ、収入確保ということだけでなく、技術としても優れていたとされ、草牟田在住の竹内新兵衛という武士は、藩主のために櫛の製造も行っていたとされ、品質の良さも有名でした。

②鹿児島城の新照院口

鹿児島城の北西側に新照院口がありました。口とは入口を指す言葉です。西南戦争の城山の戦いの直前に、兵が登っていった様子を地域の方々が伝え聞いています。現在は新照院町の住宅地から階段で城山まで登ることができます。新照院町付近はかつて鹿児島城を守るために配置された武家屋敷の雰囲気に残り、多くが数度の戦火や開発で失われた鹿児島城下において、貴重なまち並みといえます。



新照院口

③上山寺跡

城山が上山城と呼ばれていた頃に建立されたという寺院です。慶長6（1601）年に山の麓に移転し、曹洞宗寺院として再興されました。寺には観音堂があり、聖観音と十一面観音像があ



観音像（個人宅内）



仁王像（個人宅内）

ったとされています。この観音堂に仏像が納められる際、2代藩主の島津光久が灯籠を寄進しました。これが、現在も鹿児島県全域で行われる伝統行事の六月灯の始まりとされています。その上山寺関連とされる観音像、仁王像や達磨像、さらに六地藏塔などが地域の民家に安置されています。地域には他にも天永寺という寺院もありました。町内に伝わる石仏などの正確な由緒は不明ですが、おそらく上山寺や天永寺に関連したものでしょう。

④床次竹二郎誕生地

江戸期に宮之城島津家に仕えていた^{とこなみまさよし}床次正精の子です。正精は、明治政府に裁判官として仕え、洋画も学び、西郷隆盛の肖像も残しました。その子の竹二郎は、鉄道大臣を務めるなど政治家として活躍し、原敬内閣では内務大臣も務めました。鹿児島中央駅に胸像があります。



床次竹二郎誕生地

⑤山本ノブ住居跡

山本ノブは安政4(1857)年に新照院で生まれました。のちに山本家に嫁ぎ、連合艦隊長官を務め空母による戦術に熱心だった山本英輔海軍大將を産みますが、夫が西南戦争で官軍側として参戦、戦死したため苦労を重ねました。晩年は、新照院の谷あいでも静かに暮らし、住まいの跡に碑が建てられています。



山本ノブ住居跡

⑥鹿児島神社

江戸時代の書物「三国名勝図会」には宇治瀬神社として出てきます。鹿児島神という神様を祀り、桜島近くの^{かんぜ}神瀬にも社があったことから、桜島の古い名前と思われる「鹿児島」と関係が深い神社です。大噴火することもある火山が荒ぶらないように神様として祀ったと思われます。また境内には、周辺にかつて田んぼがあった頃に祀られていた田の神などもあります。



鹿児島神社

⑦旧島津氏玉里邸庭園（国指定文化財）

10代藩主・島津斉興によって天保6(1835)に造営された大名庭園です。斉興が隠居後に住まい、その死後は妹にあたる勝姫が長く住んでいました。西南戦争によって焼失しましたが、斉興の息子で、最後の藩主忠義の実父である久光が再建し、晩年を過ごしました。玉里の地名は、斉興の印である玉印が由来で、久光が本家から分家する際には玉里島津家を名乗りました。庭園は幕末から明治時代に造られ、屋敷に付随した上御庭と、大きな池を持つ回遊式の下御庭の2つから成り、平成19(2017)年に国の記念物(名勝)に指定、平成30(2018)年大河ドラマ「西郷どん」のロケ地にもなりました。



旧島津氏玉里邸庭園（下御庭）

4. 甲突川左岸の近現代

明治期に入ると、鹿児島市街地の郊外として、また国道3号沿いとして発展しました。地区の北西に位置する伊敷村と接し、鹿児島市と伊敷村を結ぶ路面電車も開通するなど交通網も充実していました。また鹿児島市街地中心部にあった南林寺墓地の移転が大正初期に開始され、城山に連なる山の斜面が^{かいさく}開鑿されて広大な墓地も形成されました。

①鶴尾学舎

草牟田は、江戸期には鹿児島城下の北西部にあたり、武士が居住する地域でした。そのため、地域で郷中教育が行われ、明治維新後もその教育を受け継ぎ、地域名から採った鶴尾学舎で青少年教育が行われました。明治期の鶴尾学舎は、旧士族の子弟が中心でした。そのため商家の子は協学舎と呼ばれる学舎、農家の子は丸山青年舎という学舎で学びました。大正7（1918）年に三舎は合併し、鶴尾学舎に統一されました。

②草牟田墓地

大正2（1913）年に鹿児島市営墓地として設置されました。鹿児島市街地にあった南林寺墓地の移転に伴うもので、多くの墓が移されました。総面積は2万坪以上と広大です。大久保利通の祖父にあたる皆吉鳳徳、教育者の岩崎行親、示現流の創始者である東郷重位の墓などもあります。また、鹿児島空襲で身元の判明しなかった方の遺骨もこの墓地に埋葬されています。



草牟田墓地

③陸軍火薬庫跡

鹿児島県は火薬の原料である硫黄が採掘されることなどから、幕末期から火薬製造が盛んでした。明治政府の陸軍の火薬保管庫は、現在墓地の入口近く、「陸軍火薬庫跡」と彫られた石碑のある場所よりも高台に三棟あったといわれています。明治10（1877）年1月30日、この火薬庫を西郷隆盛の創設した私学校の生徒らが襲撃し、西南戦争勃発の原因の1つとなりました。現在は跡かたもなく、周辺は墓地になっています。



陸軍火薬庫跡碑

④新納忠之介誕生地

明治元（1868）年に新照院町で生まれました。明治 18（1885）年に東京の三田英学校に入学し、後に東京美術学校（現東京芸術大学）に入学します。そこで彫刻を高村光雲に学び、在校中から帝国博物館の仏像修復を校長の岡倉天心より命じられます。仏像の修復で奈良や京都はもちろん、日本中や海外でも活躍しました。



新納忠之介誕生地

⑤草牟田商店街

「そなた（草牟田）で茶いっぺ」のキャッチフレーズの旗が商店街に立ち並んでいます。商店街組合ができたのは昭和 47 年です。城山団地入口付近や国道 3 号沿いに店舗が立ち並びます。朝市などのイベントも盛んで、周辺住民を中心として買い物客が訪れています。



草牟田商店街

⑥路面電車（伊敷線）

大正 7（1918）年に現在の加治屋町電停から草牟田電停間が開通したのが始まりです。その後、大正 9（1920）年には歩兵第 45 連隊兵営前（伊敷兵営前）まで延伸され、後に玉江小学校電停となります。戦前は一部区間が専用軌道でしたが、戦後は国道 3 号と併用して営業しました。昭和 36（1961）年に伊敷町電停が誕生し、伊敷線は全線開通しましたが、昭和 60（1985）年 9 月末で廃線となりました。



戦前の伊敷線跡（専用軌道）

⑦鹿児島本線敷設（為政清明）

大正 2（1913）年に、鹿児島駅から東市来駅までの路線が開通しました。後に川内駅まで開通して一時期は川内線と呼ばれていました。その開通に伴い城山にもトンネルが掘られます。その際に新照院側のトンネルの上に大久保利通の座右の銘である「為政清明」を記したプレートが設置されました。



城山トンネル（新照院側）

【城西地区の主な未指定文化財リスト】

1. 甲突川右岸の近世、それ以前	
1	尾畔（景勝地）
2	小松帯刀屋敷跡
3	花岡屋敷
4	桃岡（八田知紀幽閑の地）
5	諸禽供養塔
6	鷹師の地名
7	千眼寺跡
8	薬師の薬師堂
9	石井手用水路（太鼓橋・すすけ橋・かけごし）
1 0	日枝神社
1 1	陣ヶ丘公園
1 2	櫛之木馬場
1 3	西田町から水上坂
2. 甲突川右岸の近現代	
1 4	西郷家の墓
1 5	永吉の橋
1 6	鹿児島授産場
1 7	原良の防空壕
1 8	陸軍墓地
1 9	おはら節発祥の地
2 0	米あらい節
2 1	日本澱粉工場
2 2	火力発電所跡
3. 甲突川左岸の近世	
2 3	草牟田ツゲ櫛
2 4	鹿児島城の新照院口
2 5	上山寺跡
2 6	床次竹二郎誕生地
2 7	山本ノブ住居跡
2 8	鹿児島神社
4. 甲突川左岸の近現代	
2 9	鶴尾学舎
3 0	草牟田墓地

3 1	陸軍火薬庫跡
3 2	新納忠之介誕生地
3 3	草牟田商店街
3 4	路面電車（伊敷線）
3 5	鹿児島本線敷設（為政清明）